

春
雪
集

高安月郊作

目録

佐保姫	………	一
不識菴	………	二七
芳野賦	………	三四
霧野	………	四一

惜春詞	………	四三
セレイを吊ふ	………	四八
杜少陵	………	六四
雪山行者	………	七九

明月	………	九〇
淀川	………	九一
誰が文	………	九二

濱邊の孟蘭盆	………	九五
煙賦	………	九七
三樹雜詩十首	………	一〇八

嵐山の奥にて	………	一一二
蟬の小川	………	一一三
應天門	………	一一三

里よりか染むべき

おもしろやいたゞきは
やたがらす踏みにけん

若草の燃ゆるに

谷間にはうすらひ

そよや鶯の橋に残して

かざみぐさ開かん

野邊は早水鏡

誰が爲に磨くぞ

根水ぐさくしけづりて

緑にやゑどらん

くれなゐに茲の山元

三千代ぐさよそほひ

濃く薄く重ねて

源な知られど

吾かつきなれに貸さばや

夢見ぐさこそ脆けれ

脆くとも美しくしき

いのちな恨みぞ

おもかけをまたも示さん

かゝみぐさいづくぞ

其人はいかになりけん

垣に立つ影は墨染

むらさきを松にかけばや

若衆とも女とも

しめはとて嘆くま
操こそ吾いのち
色も香も知るは誰そ
むら雀去れや去れ
鶴のみぞ許すべき
立つ勿れ雪と見ん
宵月もいとをかし
吾香にや酔ひにけん
吾肩に倚りて笑む
星も亦さびしきか
吾むれに入れよかし
遊はよあやなきに
光にてなれを知る

見る目にぞ色はありける
折らるゝな折らるゝな
うれしやなうれしやな
かざみくさ
姫君のめぐみ
先つ染むる吾顔
先つ香ふ吾袖
うすらひは解けしか
うぐひすはいづくぞ
風は尙肌寒し
雨は尙骨に染む
寒くともいとふま
我はそも花の姉

此まゝに風にちらせば
風も稍心ありけに
いざなふをいかに答へん
雨も稍なさをけ含みて
さゝめくはまこといつはり
唯受けて裾に落さん
袖ふりて衣ほどかす
白玉の姫に習うて
うすぎぬにおもて包まん
包みても覗く燕よ
吾心人に洩すな
夕日かけ水に入る頃
吾もまたなぞやはのめく

香にて吾を知れ
朝の露誰が落す
光あり香あり
なが影か我影か
苔見れば四つ五つ
空見れば三つ二つ
水見れば花ひとつ
待ち給へ我も行かばや
吾髪も水にとっきつ
水拂ひなれとくらべん
なれが結ふ髪は誰が様
吾髪はいかに束ねん

根水くさ

うすぎぬの緑解けては
鏡さへ染みつ洗ひつ
笛吹くは何の思ぞ
動かねど心動くよ
さゝなみを袂に叩き
招けども芹は遮る
絮ひねり投げて飛ばさん
うき草に憎くやとまりつ
春風よいさやつれ行け
さにあらず光さす方
西山の松に宿るか
ねたましや影も消えたり
春雨か降るは涙か

吾袖は一夜乾かず

三千代くさ

一夜二夜は浅しや
三千代までもと思へど
玉つさ誰につたへん
かりがねや早歸りし
虹の橋何渡すぞ
さゝすも獨りこがれつ
日かけはいよこまやか
くれなるいよこまやか
余りに濃しと譏るや
色より濃きはなさげぞ
余りに肥ゆと笑ふや

塵の世夢と見てしより
 うつゝともなき吾姿
 一重のさぬの糸解けて
 舞へば亂るゝ簪や
 八重かさねても尙消ゆる
 いのち短かき春の夢
 夢の間なりと美しくしき
 いのちばかりは夢ならト
 夢と消えても夢に見るト
 おもひばかりは夢ならト
 夢かうつゝかかうつゝとも
 夢も見よかしおぼる夜や

夢見ぐさ

満つるは胸の思ぞ
 卑しといふは何者
 心開くや卑しき
 媚ふといふは何者
 ゑみたゝふるは吾さが
 春風もよし散るとも
 ちるとも泥を染むらん
 春雨もよしぬるとも
 ぬるとも色はまさらん
 盃共にかはさば
 かんばせいよゝ照るべし
 いで奥にいざなひ
 塵の世避けて遊ばん

かつらをとこも何迷ふ
春のはだしは是非もなし
雲を拂うて下れよや
人の園生はわびしきに
山のあなたも君あらば
夜も眠らであかさなん
嵐迫らば衣のみ
水に散らして吾魂は
君の宮居に飛びたやな
天津乙女は妬ますや
佐保姫君や責め給ふ
許したまへや此世にて
いのち短かきむくいぞや

美しくしきのみむくいかや
さては散るまで美しくしき
花のいのちに足るとせん
あはれ吾身に先つ落つる
朝の光ぞいと清き
襟を合せば風吹くは
残る夢をもさませとや
かゞみぐさ
夢はさめてもまたも結びつ
鏡うもれて影はうもれず
飽かで別れし戀や消ゆべき
共にうつしゝおもてゝめり
君のすがたはまたも瘦せたり

吾すがたさへまたもしをれつ
 花いろをぬしや誰とは
 情を知らぬ人に口なし
 花となりては誰か咎むる
 いざや飽くまで共に咲かなん
 あはれ互にいつか飽くべきか
 飽かて咲きても春は暮るゝか
 花のすがたぞいといはかなき
 鏡みがきて清きころも
 昔の罪の今に残るか
 枝のいづくに罪やとまれる
 昔の戀の今に迷ふか
 色のいづくに戀やまよへる

八重に七重に花は咲けども
 實のひとつだに無きぞしるしよ
 その戀はいふ心悪きか
 その花はこれ戀のすがたや
 吾姿こそ清き戀なれ
 清き戀さへ洗ふむらさめ
 心さへ無き蝶は散らずや
 松見ぐさ
 心は蝶さへ花に寄せて
 落つるもいとはず園に迷ふ
 われこそ中にも弱さかぎり
 松か枝からねば立ちもえせず

未の子なればや夏に入れど
 白きもいつしか波と散りて
 影さへ消ゆれば魚の泡か
 びらさきさめては鳩と飛ばん
 暫く残るもなさけならず
 葉守の姫には濃きを好み
 汀も染むればよろづ緑
 日かけも洩れねば獨りしを
 行きたやもろとも姉につれて
 松より昇らん雲の上に
 夕ばえむらさき山を染めつ
 われはたむらさき雲を染めん
 春戀ふものにも影となりて

老たる鶯やどりかさ
 心は空ぞや身のみ中に
 まよふを晴らせやつゆぞ迫る
 みやびを

美しくしや美しくしや
 右も左も花と花
 梅に柳に桃櫻
 藤山吹に連翹や
 一足づゝにすみれぐさ
 菜の花のひなびたる
 木蓮のさとりがほ
 金盞に過せかし
 小てまりにつゝみぐさ

花柳合唱
 折らんとは
 つれなやな
 つまんとは
 こゝろなや
 花には花のおもひあり
 柳は柳のなさけあり
 其君は人ならず
 人こそ人を思へかし
 花つみてうれしきか
 柳手折りて移すとも
 夜半の涙は苦しきに
 缺けし姿をめでんとや

雲雀の舞のはやしせん
 れんげさうは誰がしとね
 瑞香のときめきて
 躑躅燃ゆるは何思ふ
 いづれ白きぞ梨すも
 海棠こそなさけ知れ
 つらばやいづれ先つ落ちん
 つまばやいづれこれやよき
 折らばやいづれこれやよき
 これや
 かれや
 いづれ
 いづれ

人は風よりこゝろなし

姫君よ 姫君よ

救ひたまへや 折られなん

助けたまへや つまれなん

佐保姫

あはれやないかにせん

人の爲には染めねど

人見るもいとはず

人折るを許さず

許さねど折らんとや

霞にやつまん

うすぎぬの隠さど

志長姫の霧借らばや

八十蔭に解けしか

そよやたをやめの花を染めて

みやびをの心移さん

たをやめ

梅のかをりを身にとめて

柳の枝に袖ふれば

桃の色染むすそより

櫻かざしてかんばせも

春をあらはす吾心

知るや知らずや山吹も

藤の陰さへいと浅き

水に寫せば椿寄り

襟を飾るか海棠の

睡催ほす春の風
雨となるともよしやよし
月は晴れてもおぼろぞや
何を思ふぞ雲井にも
圍の怨はありや否
星はいづれも同トきに
なれと相合ふものや無き
我もさびしき花の中
花と語れど言葉さへ
通すものなき園の戸や
なれは洩れても物いはす
琴にもらせばそれも泣く
怨は何の怨ぞや

花の心か我こゝろ
心こたへん人もがな
こは美しくしや花よりも
花を集めし姿かな
櫻の色に梅香ひ
柳さきたる枝振や
桃のなさけに山吹の
清きこゝろはありや否
清きこゝろを知る人に
あつきなさをさしげばや
みやびを

あつきなさはけは我もまた
清きこゝろにそゝがばや

さては花より色も香も

我ぞ知るなる君ならで

誰にか見せん我こゝろ

いでや互に語らばや

をかしやなをかしやな

花捨てゝ花に入る

男心も春どかし
をとめごゝろも春どかし
花のこゝろも春どかし

春の心は我心
我心こそいつくしめ

花と花人と人
いつくしめ春なれや

春なれやいつくしめ
花と花いつくしめ

男女合唱
春なれやいつくしめ

春なれやいつくしめ

人と人いつくしめ
一同合唱

いつくしめ春なれや

人と人花と花

春なれやいつくしめ

人と花花と蝶

いつくしめ春なれや

蝶と鳥鳥と花

春なれやいつくしめ

花と月月と人

いつくしめいつくしめ
春なれや春なれや

不識庵

霜は越路に満ちぬらん

能登は早くも秋ふけて

城も砕くる波の音

月は旗より登るなり

馬も眠るか篝火の陣

はせて静まる夜の陣

晝のいくさは飽き足らで

夢はいづくを襲ふらん

鴈はいづくに行くやらん

茲も吾手に落ちにけり

越の古巢に誰か待つさ

げにや我にも郷ありさ

何か惜まんのよふの
敵も味方も隔てなき
月を魂とも吊はん
雲は迷ふか影隠す
闇に起るは笛の聲
我も漸く引かれ行く
君はこれにぞ打たれける
君の常には似ざりけり
似ねどすゝしき最期には
君もうらみはなかるらん
我はひとり予恨むなる
天狗東魚を噛みてより
北に南に足利の

我に從ふつはものもの
月に忍ぶかおもかけの
千々にくだくるおもひには
雁のつばさも重からん
あはれ錦も夜の花
草を染めしはいくばくぞ
待てど歸らぬふるさとの
人はいつまで憶ふらん
髪は剃りても春日山
菴のあるドは太刀佩きて
去りつ来りつ法の道
馬に鞭うつ二十年
我も涙はあるものを

君と我との世なりけり
君は静に地を開き
我は動て山壞く
鋒は相合ふ川中の
島ぞ二人の獲物なる
霧も晴れ行く筑摩川
君はうしろを襲ひけり
我は前より水越えて
見ゆる日かげに八千騎
旗も躍りて風早く
突けば亂るゝ水音に
山も大浪打ちにけり
君は早くも遁れしな

鼎泡立つ秋津島
蜂と起るはいくばくぞ
無字の法知る新九郎
跡はわつばぞ守るなる
頭陀の仇打つ巖島
鄙のいくさに終るらん
何を傲るか桶峽間
夜半の嵐に裂けてより
美濃に近江の鹿逐うて
京に先づ入る吉法師
足はかゝむか皮履に
越の白雪能く踏むや
げにも睨めば天が下

かたきなくは波白く
草を焼くとも山寒し
我もことしは瘦せにけり
今ぞ望むは中原の
君も心はありけるに
我も空しく時過ごし
よその小猿に與へけり
いでやこれより八州と
北のつはもの皆つれて
富士をふるはす木がらしに
京の木を葉を試みん
あはれ雪こそ降り來れ
城もとりでも破り行く

残り惜しきは犀川に
君の頭を得んものと
おもて包みて白ぎぬに
君はいづくと呼びし時
つるぎ稲妻飛びにけり
うちは月影裂けにけり
またまかさせば駒躍り
君と白浪立ちにけり
時に望みし君が身も
今は中々惜まるゝ
諏訪のみづうみ底深く
我はひとりとなりにけり
さてもいくさぞいのちなる

途をふさぐは是非もなや
天のてだてぞ攻め難き
これは織田より武田より
討てど破れて破られぬ
敵は空しくまた堅き
有無の間のあやしきよ
我も破れぬ陣立て
有無の間も不識庵
誰ぞや虚空の大將と
呼べば月こそ静なれ

芳野賦

花を雪と人はいふ
雪を花と我もいふ
花と月と人は見る
月と雪と我も見る
月と雪と花と合せて
山と水とに眺めてしかな
罪無く彼なやむ
罪有りてこれ榮ゆ
正しくて彼敗る
よこしき義を正して
善き悪しき義を正して
春はまたかへり來にけり
あめつちを治めてしかな

水もまた埋れけり
 山もまた埋れけり
 我もまた埋めよや
 積るとも雪は拂はじ
 埋るとも花に死なばや
 死なれずば山を守りて
 花の心我も知らばや
 誰谷む誰怒る
 世の中はよしやよし
 とくくの水すゝけ
 露は花か月のしづか
 花の陰に今宵あかして

山々はいと白し
 雪は尙残るらん
 花は早咲きにけん
 雪のなごり花の使
 白雲か霞か
 花咲きぬ花咲きぬ
 鶯の聲々
 いざ行かん花は三芳野
 人はよしもの人ふも
 みやびをもわび人も
 花見るに仇やあるべき
 いざ登れいざ登れ
 おもしろや花の芳野

月と花とを共に眺めん
 何慕ふ何慕ふ
 雪わけて入りし人か
 西の海の波を静めて
 東の山の外に逐はれつ
 罪あるか罪なきか
 罪なくて敗れしは
 彼のみにても無かりけり
 如意輪堂の扉叩け
 御陵の鴉何と鳴くらん
 頭白きは花やいたく
 花の中に花と碎けて
 雪の下に雪と解けたり

月はいつの夢に眺めて
 後の涙に何と流れし
 花か雪か月か人か
 人か月か雪か花か
 あはれあはれ雪と降るよ
 まことの雪ぞ降るよ
 花に降りて咲くは雪か
 花と散りて積むは花か
 雪と舞ふは山の雪か
 花と飛ぶは空の花か
 花も雪も人のおもひか
 おもひ積りて花に足らず
 雪と落ちて共に亂るか

美しくしや美しくしや
 雪はまた花に消えぬに
 大空に月は見えたり
 月も散るか雪も光るか
 花も照るか月も香るか
 月と雪と花と合せて
 芳野の山に我は眺めつ
 わび人も眺めよや
 ものふもみやびをも
 正しきも罪無きも
 敗れしも眺めよや
 芳野の春は夢となれど
 花と散れば花と咲かん

雪と降れば雪と積り
 月と照れば月とめぐらん
 月と雪と花と合へば
 想もうつよといつか合はん
 おもひもうつよといつか合はん
 芳野もいかでか夢となるべき

裾野

裾野は霧に隠れけり
 わづかに残る夕日かけ
 うつら富士をよこぎりて
 澤の中より鳥ぞ立つ

きのふの宿はいつくぞや
過ぎしは秋の風となり
行く手に迷ふ薄烟
今宵の宿はいつくぞや

草も枕を貸すものを
なとてうまやに急ぐらん
夜半のねざめはさびしきに
月に契りし人や無き
心無き身と誰か云ふ
心余れば露に泣く

たもと拂へばまた引くは
花もなさけを知るならん

花の陰にて春死にし
人は果まで捨てざりき
月の中にと秋を待つつ
我やいつまで迷ふらん

鐘は一聲響きしが
それも野末にふるひけり
むせぶ草間のさりけす
あはれ一夜はつゝけかし

惜春詞

卯の花の垣誰が家ぞ
水白し影白し
みなかみも亦白からん
立波草はむらさきに
花いかだ亂れけり
白糸草に縫へよかし
いたどりは誰が杖ぞ
孔雀草嫁の髪
二人静いづれぞや
鶯かぐらはやせかし
ほととぎすぐさ涙染み
すいかづら何忍ぶ
鳥とまらぬは何嫌ふ

春行きぬ
花はいづくへ飛びにけん
鳥はいづくへ隠れけん
琴を叩けど絃も無し
花賣よ花賣よ
なが里はいづくぞや
花の里か鳥の里か
春の里のしるべせよ
なが頭こそ春なれや
我もかぎらん花ひとつ
なれに似合ふはさつきかや
我冠には野語聲か

とまれかし鳴けよかし
茲は山のいたゞきか
花の上は我立てば
一聲や二聲や
鳴くよ鳴くよ鳥鳴くよ
ほとゞぎすか鶯か
山鳩かひばりか
おもしるや山は樂器
樂器の上は我や立つ
聲々は誰がしらべ
音色合はせ拍子取り
春を惜む曲や引く
春を惜む曲ぞ引く

春は茲をも行くやらん
花は茲をも飛ぶやらん
雲に霞に消え行くは
面影か水氣か
飛ぶよ飛ぶよほとゞぎす
待てしばし待てしばし
春は行くとも歌となり
せめて谷間に残れかし
文落しても文字あらず
夜半の聲こそはかなけれ
鶯上山鳩よ
皆飛ぶか皆行くか
あはれいづくへ行くやらん

あはれいづくへ飛ぶやらん
琴を叩けど絃も無し
山を叩けど聲も無し

セレイを吊ふ

君も泣かるゝ身となりぬ
君の姿も隠れけり
石はかばねを寫すとも
聲はいづくに歌ふらん
水はいづくへさそひけん
波の花にや色ありし
風のしらべは鏡きし

海の女神や笛吹きし

友は遙に招きけん
つばさ怪しき鶯や
露も妙なる白百合に
愛の涙と解けにけん

君も失ふ樂園を
落つる天使となりけり
イブの姿は捕へしが
元の戀路はいづくぞや

秋風よ秋風よ

澤邊さぐれど人あらず
世にはいつまで迷ふらん
星の花園仰ぎつゝ
獨り焦れて昇りえぬ
脆きうき身は人知れず
行衛いづくぞ螢より
ひめひなよひめひなよ

野邊をさぐれど人あらず
世にはいつまで迷ふらん
人あらず人あらず

白雲よ白雲よ
行衛いづくぞ露より
脆きうき身はいかづちの
音にわなゝく草の露
月の足跡慕ひつゝ

浦回さぐれど人あらず
世にはいつまで迷ふらん
春の聲のみ残しつゝ
波の花とも碎けちる
脆きうき身はうなばらの
行衛いづくぞ木の葉より

逢うて甲斐無き鷲の羽に
君の聲さへふるひけり
彼は戀路を下りけり
君はいつまで上るらん
脆きうき身はよしやよし
戀はうき身の外なるに
捨てつあざりつ皆迷ふ
花の林は奥深し
いざや導け春の風
すみれ薔薇を分け行かん
君も袂を引かれけり
拂へあなたに誰か待つ

山姫よ山姫よ
行衛いづくぞ流より
脆きうき身は岩に裂け
泣きつむせびつ尙思ふ
なれのおもかげ寫しつゝ
世にはいつまで迷ふらん
谷間さぐれど人あらず
人はいつくに逢ふやらん
戀も捨てゝは西へ行く
脆き姿はうきものと
君と語らばをかしきに

魂の宿るどうき世なる
うき世歌へど人間かす
うき世捨つれば跡慕ふ
人のおもひぞいと脆き
脆きうき世を悲まん
あはれ茲にて泣くは誰ぞ
塵の界を離れしに
塵の界をまた思ふ
脆きなさけの美しくしや
愛はこれにぞ籠りける
戀はこれより流らん
涙あらずば戀も無く

うつくしやうつくしや
限りもあらぬ紫の
山に常盤の深緑
花は茲にぞ咲きにける
先に探るはノフリスか
唐の才鬼も招かばや
玉のうてなは寒からん
茲ぞ不朽の花の園
脆きうき身は今いづく
脆きものこそ美しくしや
脆き中にも美しくしき

波は響の余りかや
心しづまる春の海
聞けば望も遂げぬらん
しちべ妙なる音楽と
聲は其儘歌となり
語微ものいふ唇に
満ちて溢るゝなさけかな
頬はくもらぬよるこびの
日さへここがれて曇るらん
長き常世の戀も照り
星もほゝえむ眼には
眉は月こそ學ぶらめ

戀もあらずば涙無し
戀も涙も知るものぞ
美しくしき神見るならん
そよや霞の幕あきて
光洩れ来る玉の露
それぞ頭のかざりかや
髪をふるへば雨となり
袖に受くれれば霜となる
霧のうすぎぬ裾長し
梅のかをりは肌よりも
櫻とけたるかんばせや

手さへ柳のしなやかに
さゝげ出すは何やらん

あはれ桂の冠や

月の桂の冠や

誰の頭に落つらん

見ればいづれも顔赤し

しらべよきもの取れや取れ
聲は風にぞ消えにける

姿よきもの取れや取れ
文字は水にぞ書かれける

おもひあるもの取れや取れ
おもひ無くして何書かん

涙あるもの取れや取れ
涙無くして誰か泣く

戀を知るもの取れや取れ
戀を知らずは何夢む

眞を知るもの取れや取れ
眞と思へば美と思へ

茲はまことに別ちなく

兄も弟もなきものを
何をかれこれ求むらん
冠着すと天使ぞや

かつて夢みし色洗ひ
茲の光に照らさばや
見よや桂の枝茂りかな
限り知られぬ林かな

茲の桂を手に取れば
刺して茨と血を流す
下の古疵いかなりし
君の頭に痕ありや

痕はすみれの輪となりて
血は花ひくをかしさよ
君のかんばせいと尙
清き天使となりけり

君はキイツの身の上
おのが身の泣きにけり
我が泣くまとおのが身を
君の行衛に忘ればや

君は羅馬の亡き跡に
おのが恨も埋めけり

清き心の隠れ家や
 清き心に身を責めて
 いのちかこたば來れかし
 平家も町の名となりて
 草鞋のみつる藤吉の
 首も缺けたる大佛は
 天津乙女も泣かざりき
 君も來たまへ天女より
 人に生れてうきに泣く
 美女は茲にも一人かは
 今や天女となりけん
 共に雲井を飛ばんより

我は埋めト平安の
 古き都にうそふかん
 來れ茲にも葛かづら
 宮も藁屋も別ちなく
 しばし榮えしつはもの
 骨の山々紫に
 血汐流れて明けぬらん
 花も紅葉も染めぬらん
 今も都か墓原か
 いのちある間の花園か
 來れうき身の置きどころ

昔かこちし花園に
あるもあらぬも別ちなく
一夜歌うていさ舞はん

杜少陵

瘦せし身を吾驢はなやむ
秋の道降るは木の葉か
うすどろもまたも破れて
ふところの詩草ひやゝか
筆執りて十とせ二十とせ
屈原の壘に迫れど

汨羅さへ逐はれ逐はれて
吊はん賈誼もあるまゝ

梟のみ我を招くか
落つる日の方はいづくぞ
柳さへ枯れて烟らす
ふるさととは山ぞ亂るゝ

わが妻はいかにあるらん
同ト世にあるも名のみぞ
あればこそ土や囁むらめ
壁くづれ落葉つゝらん

をさな子はいくつなるらん
別れては父も知るまじ
母に似て泣くや笑ふや
たより無き風の寒さよ

我爲に彼は苦しむ
誰爲に我は苦しむ
もよとせに足らぬ此身も
よろづよに朽ちぬ文章

此心誰に語らん
曹劉は名のみさわがし
青蓮は酒に狂うて

淵明は菊に忘れつ

よこしまの思無しとて
孔聖は取りて編みしも

忠孝の道は亂れつ
國破れ詩のみ残らん

城荒れて今に幾とせ
旗は尙あなたこなたに

星と散る石は骨なりけり
茲もまたいくさありけり

此骨も妻は待つらん

此石も親は夢みん
夢の子は石にあらぬを
待つ人は骨と知らずや

拾うても妻は知るま
手に縫ひしきぬも血に染む
折れし鋒誰に示さん
親も亦飢に倒れつ

泣く聲は我か人かや
絞りつゝ呑むは何者
砂原に肉はくされど
長安に價貴とし

悪少は飽きて死ぬらん
姦雄は國に戯る
楊州の花は散りしが
曲江の柳舞ふなり

いにしへもかくやありけん
春秋の筆に懼れず
盗跖は飽きつあたくか
其人ぞ野には飢ゑける

堯舜も古き歌かや
老莊の夢ぞ穩

うつゝにはいつも争ふ
争へば虎は牛食む

牛の首人のすがたか
人の首蛇のこゝるか
強き者王となるらん
弱き者餌とぞなりける

聖人もつとめけるかな
豺狼を馴らしならしつ

虎の子に譲る冠も
洪水に長く漂ふ

桀紂の泡の戯れ
狼煙の音に消えては
湯武さへ聖と浮びつ
夷齊のみ餓ゑて死にけり

周公も夢となりけり
夢にさへ見えすなりけり
王を射て鼎叩けば
父刺して血汐飲むなり

菅仲を一人知りけり
知られては何をつとめし
天の下未だ匡さず

東海を踏みしものあり

劔掛くる友はありとも

妻殺す夫いくばく

衣刺す臣はありとも

生きながら埋めし君あり

此時の客ぞをかしき

用ふれば火にも入るなり

用ひずばつるぎ叩きて

歸らんか天下家あり

國は六つ舌は一つに

合はせてはまたも破れつ

秦關を風は越ゆれど

易水に壯士還らず

四の海祖龍攫みつ

萬里まで這うて延びけり

千歳の藥煎んとて

道を説くふみを焚きたり

みみ讀まぬ馬は鹿なり

ふみ讀まぬ猿は王なり

鴻門に舞は亂れて

虞氏の血に楚歌を身に染む

狗もまた次て莫られつ
鴻のつばさ一打
雛もまた果は食はれて
聖人と鷺は鳴くなり

たかどのはくされくされつ
草の屋の中ぞゆかしき
こがらしに壁は落つとも
谷川の氷解けたり

鳳も起ち龍も動きぬ
ものよふの春の錦や

赤壁に炎はなさき
五丈原星は飛びちる

詐りて勝てば敗れて

北南かはりかはるや

二百年雲か烟か

雨晴れて唐の日ぞ照る

太平のいさをいくばく

舞の數七つ九つ

文の道茲に開けて

千載の業ぞ成りける

いかなればまたも亂れし
いづれでか亂れ亂るゝ
謫仙は天に還りつ
我ひとり泣てさまよふ

ものゝふはいよゝ狂はん
之びすすさへいよゝ襲はん
西のかた風は鋭し
北のかた雪ぞ烈しき

かはる代は尙もいくばく
民草はいつも苦しむ
静まれば膏絞られ

亂れては血汐流さる

くるしみぞ千とせなりける

今に泣く聲も千とせや
歌ふとも聞くはあらぬか

此文字も塵とならずや

あめつちもなさけ無きかな

誰が爲に我を生みけん
誰が爲に人を生みけん

罪無くて罪に苦しむ

見上ぐれば空は遙に

月かげもいよゝ缺けたり
見渡せば河も黒みて
水音もいよゝ悲しむ

天道は大なるかな
人情はあはれなるかな
天道に情は消ゆとも
人情に天を包むん

いづくにかなさけ無からん
人こゝろ千古變らト
我文は塵となるとも
我こゝろ人や知るらん

此心のちなるかな
身は瘦せて肉は落つとも
此心いつもあたゝか
秋風は骨を吹くなり

雪山行者詞

雪の山いつまで高き
楊子江いつまで長き
ものいはぬ塔鷺はめぐりて
死の海の波いよゝ漲る
エデンの園はいづくなりけん

エルザレム亦取りつ取られつ
バベルの臺と道は壞れて
祇園精舎響のみなり
豫言者の劔折れていくばく
笑ひながらに人は生れず
泣きながら死ぬかばね叩きて
白き赤き悪魔踊るよ
眞如王の骨虎に食はれつ
釋迦牟尼の骨土に吐かれつ
孔丘の魂何に飢うらん
關帝の鬚獨り祭らる
莊周をまた蝶は夢みず
老邨は畫の關に留められ

陽明の病誰か癒やさん
うつせども尙茶毘となりけり
中原は唯砂の飛ぶのみ
北よりはまた胡迫りて
長城は唯石の守るのみ
南には早あるト變りて
因陀羅もまた力及はず
蘇利耶も今誰にかやく
信度さへ將た西に向ふよ
波立てよ雲起せ
天裂けよ地碎け
炎の神よ落ち來れ

三千世界握らんと
 地獄突きしは誰なりし
 英雄はなが子なりけり
 今の男はいかにぞや
 鬼神はなが父なりし
 今の鬼神いかにぞや
 千里の虎にむちうてや
 千里の虎にむちうてや
 雲井の龍にまたがれや
 虎は空しく肉を待つ
 龍は空しく炎吹く
 鬼も空しくなりけるか
 神も空しくなりけるか
 人も空しくなりけるか

嵐の神よ吹き上れ
 稲妻の劔打ち揮へ
 いかづちの鼓打ち鳴らせ
 日西山に傾きぬ
 東の時とならん
 東の洋の歌うたへ
 曙の姫長く待つ
 千よろづの神寄れや
 つはものどもはいづくぞや
 いくさの神の跡追うて
 西を突きしは誰なりし
 経を片手につるぎ振りし
 北を突きしは誰なりし

世の教なれ生みぬ
 世の教なれ殺す
 復た思へ復た想へ
 これぞこれいさなる
 西東合はせよや
 アレキサンダア敗れけり
 思想にて合はせよや
 思想の王と勝つは誰ぞ
 雲迷ふ雲迷ふ
 西に走るか東にか
 西は戀路の花に酔ふ
 東は死出の風に泣く
 西はふもかけ空に見る

國も空しくなりけるか
 雪の山尙高し
 揚子の江尙長し
 これも空しくなるべきか
 これも空しくなるべきか
 なが想過ぎにけり
 なが花に笑へかし
 咲く花に笑へかし
 なが教低かりき
 照る月に上れかし
 なが神は姿ありかし
 行く水に洗へかし
 なが鬼はなさけ無し
 吹く風に拂へかし

空しからねど消えて行く
 日かげ追ふとも影も無し
 嵐は花にこゝろせず
 雪さへ泥となりぬらん
 月は心のかげどかし
 姿はかのが姿どや
 楽しき園はぬしも無く
 神尋ねてもはてあらト
 はてなき空を嘆きては
 詩人ぞ神を想ふなる
 神はうつゝの詩人かは
 神は理想のきはみかな
 輪廻の車進みては

東は水の月も見ず
 西は星さへ數えけり
 東は銀の川渡る
 西は山をも碎き行く
 東は山の中出でず
 西は海をもくゞり行く
 東は海の波恐る
 西は嵐もたゞへけり
 東は雨の中に臥す
 西は入日の光追ふ
 東は朝日夢に見る
 夢さめよ夢さめよ
 空しきは唯夢なりき

寫る姿は曇るとも
放つ光に痕消えん
夢を描けば夢ならず
夢のうつゝぞ妙ならん
幻の中花ありき
うたかたは誰が影ならん
炎の上には躍り出で
涙に炎消せよかし
活人剣に死魔拂ひ
欲魔身魔天魔切れ
殺し盡して尙残る
かのが力ぞ神馬なる
鞭うつて進めよや

移り變るもよしやよし
うき世の風に身を任せ
理想の奥の神となれ
うき世の波にちりながら
神の光はかゝやかん
眞如は水の上行く
雲を拂うて動けよや
動くぞ月のいのちなる
星は落花と亂るとも
草の葉末に置く露に
玉の宿りは事足らん
心の宇宙の鏡かな
鏡に宇宙照らせかし

英雄は今いつく
鬼神は今いつく
人こそ神となるべけれ
神の涙を流せよや
神のなさけに包めよや

明月

月やわれ天地もひとつ
白妙の光のみなり
何者ぞわれを離すは
わたつみの姫の笛の音

淀川

舟待てばおひる先づ寄る
さゝなみに梅も浮ぶか
花訪はん林いつくぞ
春風に問へば村あり
魚さげて歸る翁よ
いくばくかけふは釣れたる
夕日影先に入り行く
破垣に童待つなり
花摘て遊ぶをとめよ

姉妹いづれ多きぞ
むらさめや袂ぬらさん
ぬらすとも花はぬらさん

誰が文

春は霞と消えしより
緑波立つ夕暮に
蝶のむらがる野邊見れば
花にはあらでをとめ臥す
床のすみれは色さめて
ゆりのふすまは半脱け

身にも破れし染小袖
顔を掩ふは誰が文ぞ

此文ゆゑにうかれいで
此文ゆゑにまよひけん
さちを知りしも此文か
うさを知りしも此文か
おもひやらるゝ此春は
花の深雪に埋もれて
こゝろかよはす驢夜は
月を忘れて語りしを

花の色香は失せしかど
失せぬ其身をふりすて
行衛知らさず出で行きし
人は月にやこがれけん
人はいかなる人ならん
戀をあの世に求めしか
うき名此世に厭ひしか
花より實にぞ引かれしか
をとめいかなる顔ならん
雨にぬれたるかきつばた
たよるものなき藤の花

さては散り行く牡丹かや

文はいかなる文ならん
戀かうらみか悲しみか
取りて讀まんと顔見れば
色は空しく文字あらず

濱邊の盃蘭盆

夕日はくれなる西に溶けて
淡路はむらさき幾重さめぬ
ともしび一すト浪をよこぎり
こなたの磯に寄れば砕けつ

今宵はいさり火なぞや影無き
浪も静に花も散らす
星はいくばく雲も迷ふに
須磨の關屋月を許さず

一つ二つ三つ五つ

火影出で来る蟹の筈屋

小舟浮けて帆さへ上げたり

乗りて行くはあはれ亡き魂

風はあらねど西へ流るゝ

砂に立てたる花も流るゝ

送り火も消えつそれも消えつ
尙残れるは誰ぞ闇に泣きて

烟賦

烟は浪華掩ふなり

櫻の宮の花も染む

高津の宮に見下せば

茅渚の海さへ波暗し

響はいづくさまくの

車はよもを走るなり

帆ばしらいくつ千よるづの

船は港をふさぐなり

都は遠くなりけり

五洲は近くなりけり

蝦夷と薩摩の中よりも

東の洋の市たらん

猿の眼のさかしさよ

城の郭は壊るとも

町の地の利ぞいと堅き

冠者の眼のさかしさよ

内に守りて外進む

さがは彼より傳へけん
酒も鋭き劔菱に
五人男も躍りけり

首は並びし千日に
今ぞ響くや歌舞の聲
夢の見果てぬ跡凝りて
獨骸樂む園ならん

幟ゆらめく宵月に
風も色ある春の香や
虹は五つか六つの橋
とけて影無き流かな

川も市なすくれなわの
炎行きかふ夏祭
水も燃ゆるか丞相の
怒いつまで解けざらん

起さつ倒れつつはものゝ

秋を争ふ堂島に

さかえ短き信長の

智恵を學ぶはありや否

むかしながらの人柱
冬ぞ數ぞふ茶毘の火に

雉子はいづくへ飛びにけん
墓にもいふをとめあり

梅のわたりと誰か云ふ

桃は小山を圍むなり

野にも溢るゝ菜の花は
寄せて散らしゝこがねかな

こがねしるかね花造る

機は小止まぬ一とせや

烟ちまたを掩ふなり

烟空をも隠すなり

光る寶をかぞへては
光る月日を誰か見る
富は烟と昇れども
果も烟と知るや否

煤は御堂も襲ふらん
守りさびしき石山の
跡はいづくにか立つ
天守再び建たざりき

眞田幸村其佩
刀に泛塵の二
字を象眼にて
入れしといふ

塵に泛びし太刀折れて
續く筆無き未來記に
色も空しき天王寺

堀江空しき色里や

徳を懐ひし院も無く
圓き珠さへ影となり
蜘蛛の糸ひく十重二十重
花の心はいかにぞや

芭蕉は茲に眠りけり
夢は枯野をめぐるとも
足の跡追ふ人断えず
談る林も繁りけり

西鶴茲に馴れにけり

萬句一世に飛びしかど
文字はなまめくすきもの
心動がす春の風

近松茲に老いにけり
戀にからみし世の義理に
ちるも離れぬ二しづく
歌もあはれの野邊の露

兎貫茲に飢ゑにけり
椿囁みても露にがく
筆に凝りたる肩ならで
人の肩もむいたさかな

來山茲を逐はれけり
遂に覺えぬお奉行の
名にも徳にも耳掩ふ
そこもかしまし笛の聲

蕪村は茲にそだちけり
毛馬の堤の柳枯れ
骨は都に埋れしが
またも花さくけさの春

秋成茲にそだちけり
鶉定めぬわびきみの

うきにそれ行くすねものや
果は茲をも去りにけり

山陽茲に生れけり

友も一人はありしかど

住家定むるみなかみや

ふみぞ茲より流れける

平八茲に生れけり

茲に似合はぬ陽明の

心洗ひし洞燃えて

果は茲をも燒きにけり

物の中にも折々は
心見ゆるはなどやらん
金は瓦と積るとも
玉と砕くる光あり

玉を賤しむ世なりけり
西も東も瓦積む
中の市場となるままでに
茲ぞ此世のすがたかな

烟此世を掩ふなり
瓦砕きつ瓦積み

玉を砕きつ玉を砥く
光浪華を掩はずや

三樹雜詩

其一

東山寺はいくばく
雲過ぎて曇りか
鐘鳴るは右か左か
宵月の下は清水

其二

將軍の塚は裂けたり
稻妻やよもに飛び散る
革命と呼ぶは誰が子ぞ

古寺の曉の鐘

其三

星巖の家はかしこか
山陽はこゝに住みけん
木蘭の橋に照る月
水よりかいつれ親しき

其四

橋の上行くは京女郎
橋の下洗ふ友禪
鴨川の末はいくすぢ
かはせみの影もうつるや

其五

松の樂鳥は音を添へ

畫の中に人は魚釣る
山暮れて水も烟れば
鳥は木に人は隣に

其六

窓叩く音は雀か
しほし來よ歌や教へん
戸を推せば音に遁れて
竹に入る雪の夕暮

其七

招かねど螢來りつ
逐はねどもまたも歸るよ
河風に我は睡らん
吾夢に照るか消ゆるか

其八

秋の雨今に降るなり
さりとす聲もかれ
山家集取りて開けば
戀といふ文字を目に入る

其九

貫之の妹もさめすや
小夜千鳥影はいづくぞ
笛吹かば誰か寄らん
冬の夜の風もいとはず

其十

花ささて寺も知られつ
花ちりて山も消ゆるか

一帯の緑霞むは
七橋の柳なりけり

嵐山の奥にて

月は今松に移りぬ
前の山影となりけり
驚きて躍る魚の兒
見まはせば音はまたせず

蟬の小川

蟬の小川の音聞けば

流亂して降るしぐれ
糺の森に分け入れば
またも袖打つ木の實かな

應天門

應天門に月見れば
朗詠うたふこゝろあり
大極殿の庭に舞ふ
我や昔の影ならず

西行庵

櫻のかけに塚をよめば
拂ふも惜しき花を落つる
そよや一ひらふみに入れて
あけてながめん秋の暮に

金福寺

閑古鳥いかに聞きけん
一人行き一人とゞまる
行けばとて果は枯野や
とゞまればいつも山風

詩仙堂

もみちして詩仙かゝやき
飲中の仙となりけり
あるトのみなぞやくづれぬ
墨も濃く隸書うつすは

蕭白

繪圖ならば繪圖ならば
畫ならば畫ならば
我はこれ我ならすして誰かある
明の太祖の十四世

左近次郎蛇足軒
 今こそ曾我の蕭白と
 人は知らねど鬼ぞ知る
 神も驚く筆なれや
 天の扉に墨塗りて
 地に落されしをかしさよ
 天の祕密を地に洩らし
 塵に描いて示さばや
 解さ得ずや解さ得ずや
 吾龍を龍と見ず
 吾虎を虎と見ず
 げに吾龍は蛇にあらす
 寶樓閣をめぐるなり

吾虎は狗ならず
 雲井をかける虎ぞかし
 吾龍と吾虎と
 戦へば天地鳴る
 天驚かし地碎く
 其中に祕密あり
 解さ得ずや解さ得ずや
 吾花を花と見ず
 吾鳥を鳥と見ず
 げに吾花は色あらず
 空を染めたる色ぞかし
 吾鳥は聲あらず
 無より出でたる聲ぞかし

山と水と吾胸の
其中に祕密あり
吾人を人と見す
吾佛を佛と見す
げに吾人はけものより
外に出でたる人ぞかし
吾佛は鬼ならず
人と起き伏す佛ぞかし
吾人と吾佛と
相集まりて世をつくる
境は空か地か海か
其中に祕密あり

吾花と吾鳥と
色合はしては聲となる
空と色と有と無との
其中に祕密あり
吾山を山と見す
吾水を水と見す
げに吾山は盆ならず
雲のあなたに秀てたり
吾水は泥ならず
霞の奥に流れたり
吾山と吾水と
影うつしては影うつる

解き得ずや解き得ずや
 解き得ずや解き得ずや
 あはれ此上洩らしなば
 奈落の底に落されん
 地獄に天や示すべき
 閻羅王も解きえずや
 解き得ぬ者は皆蹴らん
 王も蹴れ鬼も蹴れ
 人も蹴れ狗も蹴れ
 鳥も虫も魚も蹴れ
 これぞ吾涅槃なる
 涅槃の床に我臥して
 尚解き得ずや
 解き得ずや

大てふ文字に仰ぎ見ば
 泣くか笑ふか聲々は
 奈落の底に沈むなり
 雲か山か色々は
 虚空の上消えて行く
 月日も吹かば飛ぶならん
 造化の筆ぞいと弱き
 伎藝天女はいづくどや
 吾筆ぞいと剛き
 山の硯に雨澗き
 空の紙延べ雲磨れば
 面白や一筆に
 神龍は躍るなり

繪

十方界にわたかまり
 眼の光千代に照る
 稲妻と消えんとや
 其目こそ消ゆべけれ
 黒雲と變るとや
 其姿こそ變るなれ
 造化のうつゝ夢ならん
 吾夢こそはうつゝなれ
 夢となるとも夢なれば
 夢に夢見るうつゝかな
 尙解き得ずや解き得ず
 解き得ずば繪圖を見よ
 繪ならば繪圖ならば

畫

造化こそよかんめれ
 畫ならば畫ならば
 我ならずして誰かある
 我ならずして誰かある

海雪賦

夜ふけぬ
 月落ちぬ
 松も寐つ
 波静
 風も止む
 雨も無し

千鳥かや
 蛩の笛
 關守か
 旅の子か
 うそぶくか
 ねさめけん
 何なげく
 何恨む
 何怒る
 何笑ふ
 稍高し
 稍高し
 稍高し
 松は恨む風
 風は怒る波

文や見ん
 星も無し
 歌説かん
 人も無し
 我ひとりかや
 唯ひとりかや
 吾影も無し
 吾聲も無し
 我さへも無し
 あめつちも無し
 一聲やか
 いとかすか

我
 酒 名 其 高 我 我 天 四 立 夢 戀 色 戀
 さ も 名 し こ こ か の た 枕 切 う 遂
 か 買 よ 我 そ そ 下 海 ぬ 立 て せ げ
 な はん 我 は 石 響 鳴 名 つ 悔 か 泣
 綾 ん 高 し 塔 に ぐ る を こ 惜 む 盛 遠
 も う 買 は こ が 高 し 寫 さ め し が し
 て な は ね や づ か め づ が し 嘆 く か
 も れ ん

色 色 友 鳥 こ か 聞
 わ 戀 呼 打 の の け 勢 高 高 酒 人 波
 ざ ひ び つ っ か の 聲 は 勢 高 高 酒 人 波
 り つ つ っ か の 聲 は 勢 高 高 酒 人 波
 飽 色 に 友 と 犬 と 鼓 打 つ ら ん
 く 狂 ひ つ 競 ひ つ 遊 ぶ か
 は 業 平

聞 け や 聞 け い よ かしまし
 高 き 名 か 色 戀 か
 高 どの か こ が ね か
 酒 か 魚 か 錦
 人 は 呼 ぶ い づ れ
 波 は 嘆 く 雨

漸 漸 月 星 一
く く なら なら 点
に 横に 横に 横に の
縦に 横に 横に 横に
白み 廣が 廣が 廣が
て り り り

か かし まし や 恐る し や いた まし や
あ め つ ち は 聲 と な り け り
闇 に 鳴 る 聲 と な り け り
か げ は あ ら す 星 も あ ら す
月 も あ ら す 光 あ ら す
黒 き 夜 や 黒 き 夜 や

打 つ 音 か 倒す 音
倒るゝか 戦ふか
逐ひ 逐はれ 勝ち 敗る
一人かや 二人かや
三人かや 千よるうか
水鳥の 聲 閑の 聲
火牛の 聲 か 楚歌の 聲
風に 碎くる 蒙古船
波に 飛散る 無敵艦
赤壁か 關が 原
十字軍 大涅槃
人も 駒も 鳥も 虫も
魚も 草木も 皆叫ぶ

風に乗るよもに落ちけん
 松も亦腕を染まれつ
 波も亦額ゑどらる
 蜚の屋も玉のうてなも
 わかちなく白くなりけり
 くしや美しくしや美くしや
 あめつちは色となりけり
 朝日かけ雪に耀く
 此色は何の色ぞや
 此光何の光ぞ
 酒の色衣の光か
 殿の灯か髪のかざりか
 名の端か富の餘りか

黒き夜はいよよ紫
 紫はいよよ黄ばみて
 紅の朝日出てたり
 朝日かけ天地耀く
 泣く聲はいづくなりけん
 呼ぶ聲はいづくなりけん
 叫ぶ聲うめく聲々
 おめつちの聲はいづくぞ
 おもしろやおもしろや
 島山に雪はつもりつ
 いつしかにかくは降りけん
 人呼べどなれは聲無く
 雨に乗り空や下りし

勢か人のいのちか
 始より色もなかりき
 今となり光あるべき
 此光誰に質さん
 此色を知るは何者
 雪舟は筆措きつ
 蘇子瞻は髯ひねる
 スピノザは何磨く
 維摩詰は尙起きす
 たちばなか
 マドンナか
 聖典か
 眞經か

あはれあはれ解け行くか消え行くか
 これも亦解け行くか
 これも亦消え行くか
 消ゆとも光ありけり
 解くるとも色はありけり
 色あれば色消えん
 光あり光照る
 光あり光照る
 色消えて光照る
 光照る色も照る
 色もあり
 光あり光あり
 光あり光あり
 うれしきかそれぞ音なる
 うれしきかそれぞ聲なる
 悲しきかそれぞ音なる

光こそいのちなりけれ
光こそ光なりけれ
朝日かげいよゝ昇りつ
漸くは山にかゝらん
夕には海に隠れても
星月夜闇となるとも
松風の音を枕に
村雨の露をふすまに
波の歌聞て眠れば
此光夢に照らん

雑詩

秋寒しいでや登らん
たかどのに日は斜なり
鳥盡きて山ものいはす
欄干に消ゆる文字あり

一聲は虫か小鳥か
耳立てば泉したゝる
菩提樹に寂や質さん
入相の鐘も一聲
ささはしに立ち思へば
みさゝきにもみぢ散りこむ
こゝるなや風はまた逐ひ

飛び飛て水に入るなり

きのふにて稲や收めし

柿落ちて村もさびたり

鳥の宿守るは楓か

引板ひけば鳩ぞ立つなる

寺見えて路は盡きたり

秋の野ら空もしぐれつ

夕附日もみちたよりて

裏見れば露もくれなる

雨晴れて日はまだ見えす

光のみ山に落ちたり

山かげに烟一すぢ

家いくつ鶏の聲

かからくと響く車や

見かへれば妻を載せ行く

行く時はうしろ押しけん

物賣りて歸るいづくぞ

地藏尊半埋れつ

鶏頭花獨りくれなる

泣きながら来るちどあり

田の中に墓は三つ四つ

日暮れて村も烟れば
水のみぞ白く残れる
鳴きながら野鴨歸るに
いかなればをとめ遅きぞ

秋篠の里はいづくぞ
北南しぐれのみして
古寺の軒に憩へば
佛さへ衣ぬらしつ

鶴を煮る時に逢ひけり
琴負うて獨り去らばや

歳々に秋は身に染む
風寒し途の長さよ

空しき山に雨を聴けば
春の花猶夢に散るよ
秋の浪立つ海を見れば
かけはうつゝか月ぞ白き

短歌

いなづまによもの海原飛び行けば
筆投げてかの大空を裂きて見ん
千代によるづよ浪にちる見ゆ

吾ふかなたに道はあるかあらぬか
 吾ふは富士に埋めんと思ひしに
 また降るか花のしづくに筆染めて
 花ふみし足を洗へば早瀬川
 里の子に花の有家をたづぬれば
 さそはれて水にしたがふ青柳の
 祭見て歸る堤の夕風に流れつ
 かざす葵もちりて流れるつ

142

思ふ事扇に書きて行く水に
 龍釣りて針無き糸をたるとまに
 細川も山名も逝きしさみだれを
 分行かば世をすて人の骨ふまん
 ながむればこゝろして見上嵯峨の秋草
 つれづれに合はす秋の夜の雨
 霜消えて増すとも見えぬ冬河の

143

ものゝ日かげを渡るにはたゞきかな

もつゝるぎを照らす冬の夜の月

たれ待ちて磯に女の立つやらん

先立ちて歸る都は白玉の

うてなに獨り笛や吹くらん

大空を蛟に乗りてさまよへば

なき人を吊ふ墨の乾かぬに

我を吊ふ泉來にけり
徐文長
いつはりに狂ひしものを風立ちて
まことに狂ふ雪やあられや

短句

秋風やいづくより来ていづくまで
鳩飛て夕日をこぼす銀杏かな
しぐるゝや日も橋渡る大堰川
長吉の詩囊さぐればもみぢかな
一休の鬨骸に酌めやけさの春
太閤の墓より高しいかのぼり

白梅の夜あけては見るしづくかな
 紅梅や尼の姿の寒げなる
 朱をすれは易に點うつ櫻かな
 合ふといふ春の夢さへおぼろかな
 柳さくら内に齒を病む女ありかな
 をどり子や畜生塚の土震ふ
 遣羽子の戀より高きまがきかな
 花守の袖より落す戀歌かな
 盛遠の昔知られつ山さくら
 京の花五人男の降られけり
 浮瀬の傘落しけり春の雨
 海棠の人も眠るか春の雨
 かつき着て業平なぶれおぼる月

花賣のかしらに白しよべの月
 たちばなやこそこの扇に何書かん
 さみだれや木曾殿此頃色白なり
 點滴の数よむほどに夜明かな
 梅雨晴や屋根に鶏鳴く水うまや
 さみだれの富士をつんざく五郎かな
 梅雨晴や十郎の顔など青き
 初かつを幡隨院の朝寐かな
 蚊を打て吾血に汚す吾身かな
 叡山に白旗立てり初嵐
 淵明の酒さめにけり夜の菊
 雁鳴くや蘇武此秋は胡を思ふ
 落つる身のまた蜘蛛の巢にもみぢ哉

贈りたき人は隠れつ水仙花
地獄見て醒むれば池のはちすかな
蝶一つ四睡をめぐる日長かな
洩るまゝに坐して眺めつ後の月
初雪や石煮る中へちるもあり
雪の聲氷の聲となる夜かな
獨りひけば一人聞きけり峯の月
兼好
唯ひとつ捨てぬものあり春の月
西行
名月や頼朝と見し夜もあり
孤客

秋寒しまたふるさとの文を読む
棄婦
文囁めば聞くともなしにほとゝぎす
樵夫
花一枝そへてわするゝ重荷かな
淀川
上り帆や春の堤の幾曲り
芳野
骨埋む花に花そふ恨かな
東大寺
木がらしを引裂て立つ仁王かな
鴨川
風に臥せば月の上行く水も見ゆ

青柳や風より白き酒の旗
丈山も半は渡れ加茂の月

馬はねて興も車も青嵐

山寺や我足音にちるさくら

山風や蚊屋は當りて螢落つ

虫鳴くや木も草も無き庭の雨

破垣や風防ぐには櫻あり

矢口

童一人載せて漕ぐなり冬の川

龍華寺

富士は雪三保は風吹く春の海

舞子濱

松や行く白帆やとまる春の風

大原

しぐるゝやもみち巻込む水車

嵯峨

もみちにも谷はありけり鹿の聲

祇園

春の夜や花につまづく舞扇

忠盛も口には負けしをけらかな

老龍庵

詩かるたは妻に負けたり屠蘇の酔

春風や落花に消ゆる魚の泡

花賣と半里つれだつ春の暮

かかげるふやなれも戀知るすみれ草

すみれ摘めば文かくまでに萎れけり

魚釣れば竿を飛去る蜻蛉かな

頭巾二つ途中に語る小春かな

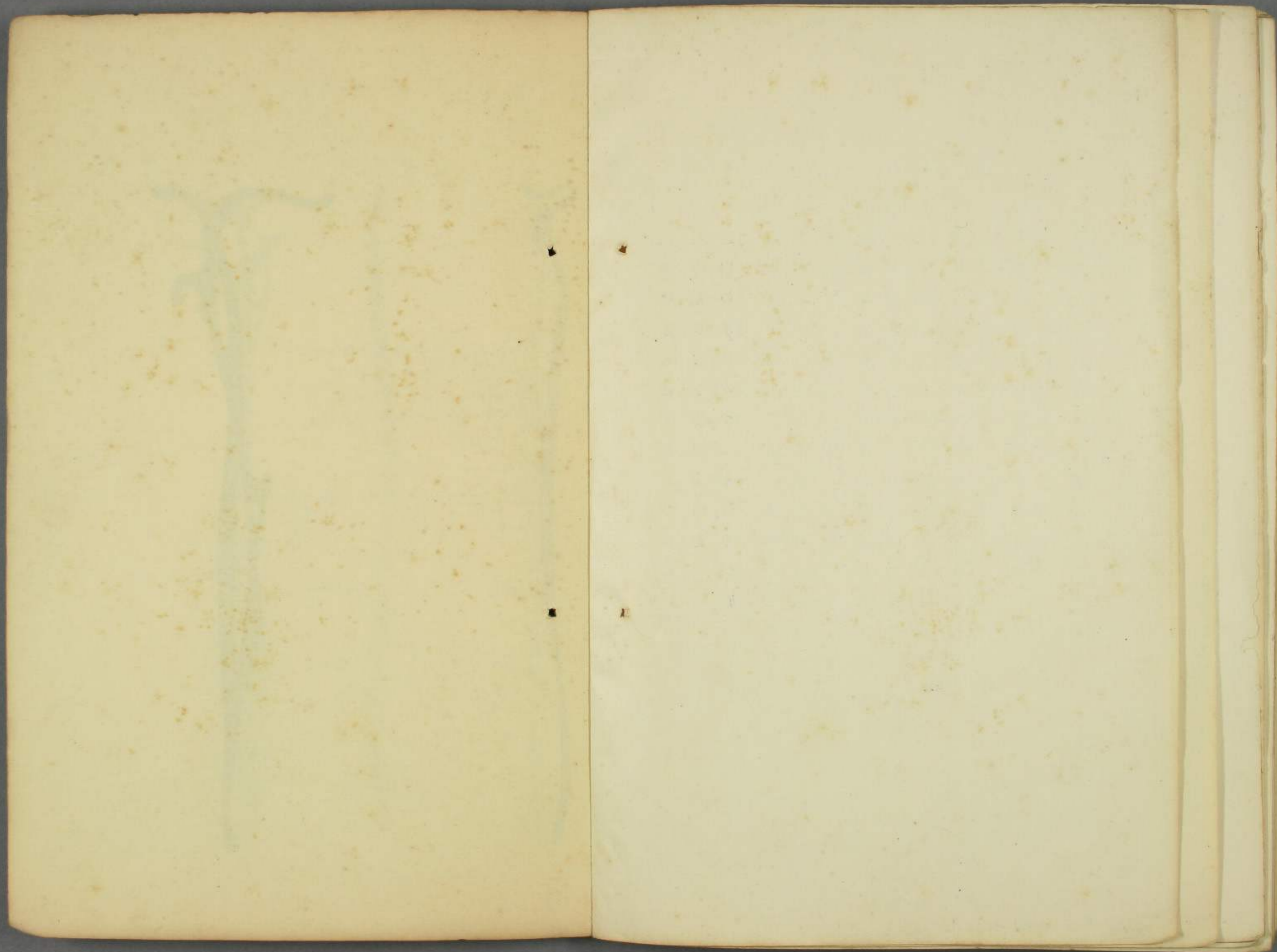
牛に乗て揚州さがす日長かな

山ひとつ空に見出す枯野かな

みづうみや糞はいつか雪となり

冬枯や山僧歸る祇園町

尼寺に姫君隠すかきつばた
月や雨山より高き高灯籠
遠山の果はいづくぞひとつ雁



夜 金 大 重 文 公 湊 眞 祇 吉 月 江 伊 後
 濤 宇 平 八 藤 武 法 幸 判 大 百 明 城 寅 戸 羽 日
 樂 塔 盛 師 川 村 官 合 郎 照 渡 劇 衣 記

高安月郊著作
 新体詩集

既刊
 同
 同
 同
 近刊

文同文
 淵港 淵
 堂 堂

小樂
 說劇

既刊
 同
 同
 同
 近刊

文
 學
 藝
 界
 書

明治三十六年四月十四日印刷
 明治三十六年四月二十日發行

著作兼發行者 高安三郎
 京都府上京區東三本木南町八番戸
 印刷者 江間傳三郎
 大阪府東區本町一丁目三十番邸

印刷所 株式會社 大阪國文社
 大阪府東區本町一丁目三十番邸
 取次所 金尾文淵堂
 大阪府東區南本町四丁目卅六番邸